

様式6 (第15条第1項関係)

平成29年4月7日

独立行政法人 日本学術振興会理事長 殿	研究機関の設置者の 所在地	〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8	
	研究機関の設置者の 名称	国立大学法人東京芸術大学	
	代表者の職名・氏名	学長 澤 和樹 (記名押印)	
	代表研究機関名 及び機関コード	東京芸術大学	12606

平成28年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2802	補助事業の 完了日	平成29年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	美学・芸術諸学 3001
補助事業名 (採択年度) マルチメディア・コンテンツに関する領域融合・実践型 国際研究ネットワーク形成 (平成28年度)				補助金支出額 (別紙のとおり) 17,496,690 円	
代表研究機関以外の協力機関 なし					
海外の連携機関 Univ. Paris-Sorbonne, Stanford University, Ecole d'Emseignement Supérieur d'Art Bordeaux, National Film Board of Canada					
1. 事業実施主体					
フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野	
主担当研究者 西岡龍彦 担当研究者 福中冬子 岡本美津子 山村浩二 布山タルト 計5名	東京芸術大学 東京芸術大学 東京芸術大学 東京芸術大学 東京芸術大学	音楽研究科 音楽研究科 映像研究科 映像研究科 映像研究科	教授 准教授 教授 教授 教授	作曲、電子音響学 音楽学、音楽美学 映像メディア学、 制作論 映像創造表現 映像理論研究	

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先 (電話番号、e-mailアドレス)
マツムラ ハナエ 松村 英恵	国際企画課国際交流係	050-5525-2786 intl-tua@ml.geidai.ac.jp

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

2. 本年度の実績概要

本事業のもっとも大きな目標である「マルチメディア・コンテンツに関する領域融合型の実践的な国際共同研究を推進するための国際ネットワーク構築」に必要な準備段階として、海外連携機関であるスタンフォード大学、カナダ国立映画制作庁、パリ第4大学への担当研究者の視察と Battier 教授、後藤講師の招へいを行い、今後の共同制作・研究のための基礎的な体制を作った。それぞれの連携機関では、本事業に対して大きな関心が寄せられており、その背景として、マルチメディアに関する同じ問題意識があることがわかった。また、若手研究者二名をパリ第4大学に派遣した。研究者の東川は短期間の派遣であったが、研究の成果を3月の国際音楽学会で発表している。本学において、本事業の適正な予算執行や事業の進捗を監督・統括するために、音楽学部学部長を委員長とする「頭脳循環プログラム運営委員会（教員9名、事務6名）」を立ち上げた。

【音楽領域】

西岡、福中が視察したスタンフォード大学では、マルチメディア研究の中心は CCRMA (Center for Computer Research in Music and Acoustics) という研究所で、主要連携研究者の Kapuscinski 准教授と CCRMA の責任者 Chris Chafe 教授との綿密な打ち合わせを行った。Kapuscinski 准教授の来年度来日の予定や、若手研究者派遣の確認、共同研究のテーマなどが話合われた。施設の視察とマルチメディア作品の創作や研究をおこなっている Mark Applebaum 音楽学部教授、Paul de Marinis 美術美術史学部教授などアーティストの紹介があり、メディア作品の創作技法やさまざまな問題点についての議論があった。学内でのパネル・ディスカッション「The Future of Music」やメディアアートの展示会、CCRMA でのレクチャー、コンサートなどを体験することで、スタンフォード大学におけるマルチメディアの最先端の研究・創作の場であることが理解できた。

パリ第4大学を中心とする視察を西岡が行った。パリ第4大学に若手研究者として派遣されている東川愛から研究の進捗状況の報告を受け、打ち合わせを行い、主要連携研究者である Battier 教授と3人で今回の視察の予定と共同研究について話し合った。パリ第4大学 Cluny 本校では、IREMUS (Institut de recherche en Musicologie) のコロック「音楽分析と社会的表象」に参加。パリ第4大学の Odeon 校（大学院）視察。パリ第4大学の最も新しい校舎 Clignancourt 校では、ソルボンヌ大学オーケストラによる Battier 教授の最新の作品「Rain Water」を聴く。パリ第4大学の音楽学研究所責任者 Cecil Davy-Rigux 氏 (Directrice de l'Institut de recherche en Musicologie) に Battier 教授と共に面会。本事業への協力を要請し承諾を得る。Battier 教授とは、22.2 マルチチャンネル音響システムによる表現の可能性を共同研究のテーマとすることで合意。パリ滞在中に共同研究をスタートさせた。

パリ第4大学と関係の深いマルチメディア・コンテンツの創作・研究組織をいくつか視察した。GRM(Groupe de Recherches Musicales)責任者 Daniel Teruggi 氏に面会。IRCAM で Grégory Bller (Head of the Department for Reseach/Creation interfaces)、Mikhail Malt (Computer Music Desugner Teacher/Reseacher)、IRCAM のソフト開発部門の最高責任者、Frédéric Bevilacqua と最新のソフトウェア開発、マルチメディアについて討議。パリ第8大学の音楽研究・創作部門の責任者の Anne Sédes 教授からこの研究所についての説明とマルチチャンネルスピーカーの設備などを視察。Alain Bonardi 教授が主催するライブ・エレクトロニクスミュージックのコンサートを聴く。

スタンフォード大学とパリ第4大学とはマルチメディアに関する問題意識を共有しつつ

も異なる方法論で創作・研究を行っていることがわかった。両校と関連研究組織、そして東京藝術大学との連携によって、本事業の目的を高い次元で達成することが可能であると確信できた。

【映像領域】

下記の4つの計画の項目を実施し、来年度に向けて大きな成果を得た。

(1) 研究ネットワーク構築へ向けた準備として、研究担当者の岡本美津子、山村浩二が NFB に出向き、NFB の連携研究者である、Michael Fukushima と打ち合わせを行った。

NFB では、Michael Fukushima の他に、Maral Mohammadian 氏が加わり、準備に向けた議論を行った。主な項目は下記の通り。

- ・ NFB で現在実施している具体的な制作や研究の視察
- ・ 東京藝術大学と NFB との連携強化について
- ・ 今後継続した展開を行っていくための、連携協定締結の可能性について
- ・ 映像＋音声コンテンツ若手育成プログラム HOTHOUSE の共同開催の可能性について
- ・ 3D Stereo Scope や、VR、インタラクティブコンテンツなど新しい分野での共同研究の可能性

(2) 本事業の準備作業として、派遣若手研究者の派遣先期間の研究状況の把握と、検証作業に必要な人的ネットワークを確保するため、若手研究者の松浦昇氏が国内でリサーチを進め、覇権候補先のコロンビア大学や、ボストン美術館へのリサーチを進めた。

(3) 研究インフラの整備：検証作業、研究のための国内外のネットワークを整備するため、カナダで NFB とのネットワークを確立する様々な議論を連携協力者の Michael Fukushima 氏らと行うとともに、結びつきの深いコンコルディア大学を調査のために訪問し、ネットワークを更に広げた。

3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

音楽・映像の両領域共に、本事業の「メディア研究における研究と実践を横断する新たなネットワーク作り」は、世界のトップレベルの研究者、研究グループとの共同研究・共同制作が可能となる大きな成果が得られた。それは、来年度の音楽・映像の両領域の研究者と創作者が領域を超えて有機的に連携・融合することで新たな実践へと発展させる基盤となる。研究領域では、欧米諸国が先行する領域融合型のメディア研究の大きな前進が期待できる。進捗状況の例としては、Battier 教授との共同研究が本年度からスタートしているが、22.2 マルチチャンネル音響システムとマルチチャンネルのその他のフォーマット

(5.1、6.1、7.1、10.2 など) による音響表現の比較研究を行い、その成果をアニメーションなどの映像との融合による共同作品制作に繋げて行くことができる。

本事業のスタート時点から想定されていたことであるが、本年度は若手研究者の派遣件数が少なく、また、音楽と映像の領域横断的成果や（学会等での発表の成果はあったが）学術雑誌等の論文発表のような形での結果を出すことができなかった。これは今年度を来年、再来年に向けた準備・調査として位置づけたことによるものである。パリ第4大学へ派遣した若手研究者への連携研究者からの評価は非常に高く、来年度以降の国際的な研究活動の活性化が可能になる基盤を作ることができた。

4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・著者名について、責任著者に「※」印を付して下さい。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については <u>下線</u>、若手研究者については <u>波線</u> を付して下さい。 ・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>として下さい。 	
1	
2	
3	
4	
5	

②学会等における発表

発表題名 等	
<p>（発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については <u>下線</u>、若手研究者については <u>波線</u> を付して下さい。 ・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>として下さい。 	
1	（シンポジウム招聘） <u>福中冬子</u> 、藪前知子、吉原太郎『アート寺小屋：アートすることの意味』、埼玉県立近代美術館、2017年1月15日。
2	（招聘キュレーターおよび講師） <u>Fuyuko Fukunaka</u> , “Multiculturalization of Contemporary Japanese Music,” Music from Japan Festival, The Scandinavian House, New York, February 15 to 20, 2017.
3	（学会個人発表） <u>Fuyuko Fukunaka</u> , “Music of “the Left”? Schoenberg, Leibowitz, and Sartre’s <i>l’engagement</i> ,” <i>the 20th International Congress of the International Musicological Society</i> , Tokyo, the Tokyo University of the Arts, March 21, 2017.
○ 4	（学会シンポジウム）Federico Celestini, <u>Fuyuko Fukunaka</u> , Tobias Janz, Tobias Robert Klein, Lap-Kwan Kam, Christian Utz, Chien-Chang Yang, “Entangled Histories of Music. Narrating International Avant-gardism after 1945,” <i>the 20th International Congress of the International Musicological Society</i> , Tokyo, the Tokyo University of the Arts, March 22, 2017.

5	(学会個人発表) <u>Ai Higashikawa</u> “Musical Transmutation of H. Michaux’s Text: The Poïétique of <i>Poésie pour Pouvoir</i> (1958) by P. Boulez,” <i>the 20th International Congress of the International Musicological Society</i> , Tokyo, the Tokyo University of the Arts, March 23, 2017.
6	(企画・制作) 音楽監督: <u>西岡龍彦</u> 「ライブ・エレクトロニクスによるコンサート」ArtPath, 東京藝術大学音楽学部千住校地スタジオ A。 西岡研究室のマルチチャンネル音響システム作品の発表。作曲者: 宮下和也、久保暖、川島大輔、近藤礼隆、満潔 2016年12月17日

5. 若手研究者の派遣実績 (計画)

【海外派遣実績 (計画)】

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
派遣人数	1 人	7 人 (2 人)	6 人 (5 人)	8 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の海外派遣実績】

派遣者①の氏名・職名: 平野貴俊 PD (平成 28 年度博士課程修了)

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動) マルチメディア作品の実情を巡る調査、考察およびその歴史的検証。 (具体的な成果) 当該者の博士課程修了において課せられる課題 (年末研究発表会) のため、当該年度の派遣は短縮せざるを得なくなった。渡仏後は受入研究者と今後の計画について策定を始めている。				
派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
フランス、パリ (パリ第 4 大学、マルク・パティエ教授)	2 日	298 日	0 日	300 日

6. 研究者の招へい実績 (計画)

【招へい実績 (計画)】

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
招へい人数	2 人	4 人 (1 人)	6 人 (3 人)	6 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者①の氏名・職名：後藤 英 ボルドー芸術大学講師

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

マルチメディア・アーティストとして国際的な活躍をしている後藤氏は、本事業の東京芸術大学との先端的なメディア作品の共同研究及び共同創作の具体的な目標設定と研究計画・研究方法について、西岡、福中、Battier 教授と打ち合わせを行った。音楽・映像領域の「創作」と「研究」をより密に連携させ、実践的研究体制のプロタイプを確立するという本事業の重要な目的の中で「創作」部門を西岡と担当する。また、メディア研究における研究と実践を横断する新たなネットワーク作りのために、パリ第4大学、ボルドー芸術大学、それらの大学と共同研究体制にあるパリ第8大学、IRCAM、GRMなど、ヨーロッパの音楽・音響とメディアの創作・研究の最先端の大学や研究所と東京芸術大学とが、本事業の目的達成のため円滑な情報交換と共同制作を実現するためのコーディネートを行った。

(具体的な成果)

フランスを中心とした、世界トップレベルの大学、研究機関との共同制作・研究に必要なネットワークが構築できた。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ボルドー芸術大学、音楽学部、フランス 西岡龍彦 東京芸術大学音楽学部	10 日	日	日	10 日

招へい者②の氏名・職名：マルク・バティエ (Battier) パリ第4大学教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

音楽学者であり、自身が創作もするバティエ教授には、戦後ヨーロッパを中心に、音楽創作の方向性はマルチメディア・アートの参入によりどのように変化したか、その検証における歴史的・技術的意義を理解する上でのガイダンスを御願ひしている（特に派遣者向け）。今回の招聘事業ではその打ち合わせを詳細に行ったほか、自身の最新の研究成果について発表も御願ひした。

(具体的な成果)

今後の事業推進にあたっての詳細な打ち合わせおよび自身の最新の研究成果について発表。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
パリ第4大学、音楽学研究所、フランス 福中冬子 東京芸術大学音楽学部	13 日	10 日	10 日	33 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

--

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。